

「Ⅴ」9月1日（木）大山街道・二子の渡し場跡・岡本かの子碑・二ヶ領用水

（集合；東急田園都市線「二子新地」駅改札口9；50分厳守同時出発）

（1）行程；「二子新地駅」→二子渡し場跡→二子神社・かの子碑→江戸の建物→二子・溝口宿→二ヶ領用水→亀屋→溝口神社→宗隆寺→太田家→庚申塔→JR「武蔵溝ノ口駅」。

（2）昼食場所；「」。TEL；044――

1・大山街道（矢倉沢往還・大山道・青山道・相洲道・現在は昔の道筋をほぼ踏襲する246号線）江戸赤坂御門を起点とし、二子の渡し、二子、溝口を経て多摩丘陵を上っていく街道。さらに厚木、伊勢原、秦野、矢倉沢を経て、足柄峠を越える。東海道と甲州街道の間を江戸に向かう脇往還として、厚木街道・矢倉沢とも呼ばれている。

この道は大山詣での道、大山（高さ1246m・丹沢山地・別名；雨降山）五穀豊穰・商売繁盛の神として江戸庶民の信仰（大山講）を集めた阿夫利神社がある。物資輸送ルートとして重要だった。駿河茶・綿・伊豆椎茸・乾魚・秦野たばこ等。大山旧道、二子・溝口地区の昔の面影を探訪します。

2・二子の渡し場跡（二子橋大正14）

大山街道を東京と結ぶ「二子の渡し」は旅人にとっても、農産物を商う人にとっても無くてはならない存在でした。渡し船には人馬を渡す「徒歩舟・かぶね」と、荷物などを載せる「馬舟・ウブネ」（荷車なら5台・荷馬車でも2台程度載せられた）があった。

渡し場近くの河原には、茶店、料理屋、菓子屋、蕎麦屋などもあって、舟待ちの人々を相手に繁盛したと言う。しかし、洪水の度に3、4日の川留めも珍しくもなかった。多摩川に本格的な橋が架けられたのは、大正14年、二子橋と名付けられた。

3・二子神社（祭神、天照大神）・岡本かの子文学碑・大貫家の人々（かの子・岡本太郎）

二子神社、創建1641（寛永18）歴史は300年を越える。昔は神明社と呼ばれ、明治になって別の神社「大陸天稻荷」を合祀、以来天照大神を祀り、社名を二子神社とした。その神社の脇に彫刻

家岡本太郎制作の「かの子文学碑」(母かの子を思いつつ「誇り」と題す・除幕式は昭和37秋・庭園風の築山(ツツヤ)と台座は丹下健三設計)があります。

大貫家は江戸時代、屋号「大和屋」、幕府諸大名の御用を務めた商家。明治になってこの旧家に生まれたのが、大貫雪之助(島崎藤村門下24歳で急逝・岡本かの子(雪之助の妹・21歳で漫画家岡本一平と結婚、文壇に登場)・岡本太郎(かの子長男)。

4・光明寺(浄土真宗)・二子学舎今から400百年近くも前、天目山で滅んだ武田の家臣が、多摩川伝にやって来て、此の寺に逃げ込み、やがて出家。専浄と号した彼が、その後、本願寺教如上人の教化を受けて、それまでの天台宗から浄土真宗に改めたと言う。この寺の本堂は一時(明治7～9年)教室として使われ「二子学舎」(現小学校)此の地の学校教育は光明寺本堂から始められた事になります。境内に岡本かの子の兄・雪之助の墓、谷崎潤一郎とも親交の深かった大貫雪之助。若くして逝った文学者。

5・二子・溝口(二子村・溝口村)

二子村・溝口村が大いに発展したのは、江戸時代の大山街道が宿駅になってから、江戸から、あるいは、江戸へ、多くの産物がここを通り、旅人相手の旅籠や商家が軒を並べていた。街道に行く土産として売られていた錦絵等もあった。(当時の画家青陵岩清が寛政3=1791年作、錦絵右下には販売元溝口村名主●丸屋七右衛門の名)。

6・江戸時代の建物；蔵造りの店

田中呉服店江戸時代から続く老舗、火災を守る母屋との仕切は厚い土戸・太い柱・ホゾ組み立て・瓦屋根・二階の格子泥棒除け)

7・江戸時代からの薬屋(灰吹屋の生薬はよく効くと評判)初代鈴木仁兵衛のあとは代々仁兵衛を名乗った。特に3代仁兵衛は俳句で知られ、俳号は、玉川老人亭宝水。

此の地の師匠格、文政12年(1829)建てた芭蕉句碑には「世を旅に代(汐)かく小田の行きもどり」芭蕉。今は宗隆寺境内に移されている。

8・陶芸家浜田庄司の家(民芸家・神奈川県生まれ、本名、象二・文化勲章・1894～1978)絵を描くことが大好きな少年として、溝口に日々を送り、やがて陶芸の道へと進んだ彼が、第2の故

郷として栃木県益子を選んだのは、30歳の時。自然に溶け込んだ生活の中から、数々の作品を生み出され、磨きがかけられ、世界的な評価を得るまでになった益子焼。庄司は我が国最初の「人間国宝」。古刹、宗隆寺に眠る。

9・溝口・二子宿の間場跡（溝口・二子宿1669＝寛文9・両宿で人足二人、馬一疋程度・本業煙草、麦卸問屋）江戸時代中頃から代々溝口・二子宿の間屋役を務めた名主を兼ねた、丸屋・鈴木七右衛門の屋敷は、二ヶ領用水に架かる大石橋の近くにあった。「継立て・つぎ行」馬の乗りかえ、人足を雇う。村の有力者が本業の傍らやっていた。

10・二ヶ領用水・大石橋（大山街道との交差点）

現在の川崎市のほぼ全域に稲毛・川崎領の二ヶ領を潤す農業用水路として建設されたのが、二ヶ領用水。多摩川の水を利用するためには、堤防を築き、洪水を防ぎ、必要な水だけを引いてくる用水路を掘らねばならなかった。これは、第2多摩川を造るに等しい大事業。徳川家康の命を受け工事の指揮に当たったのは代官小泉次太夫。完成したのは1611（慶長16）14年間に及ぶ難工事（専門道具無く・農民の苦労）。用水は久地の「分量樋で4分」「円筒分水；田中丘愚（川崎宿）設計堰からの流れを4つの異なった幅に分け水量比を保つ方法、しかし、この方法では水の争いが絶えず理想的、正確な分水装置、円筒分水（サイホン原理）完成は昭和16年・現在も使用」。

11・府中街道（川崎から府中へ抜ける東海道と甲州街道を結ぶ街道）

多摩川の沖積（チウキ・流水土砂積重）平野を走り、小杉、溝口、登戸などの町を発展に結び付けた、重要な縦貫道路。川崎—溝口間乗合馬車大正2年・翌年二子—菅間・乗合自動車大正8年・南武線営業開始昭和2年の事。

12・国木田独歩・亀屋入口（亀屋会館）

国木田独歩が武蔵野を巡り歩き泊まった宿が「亀屋」「忘れ得ぬ人々」明治33年3月独歩27歳。宿屋・煙草や・泊まり客は主に薬、金物、まゆなどの商人。独歩が泊まった縁から、昭和9年亀屋主人鈴木久吉が建てた独歩碑・題字は島崎藤村。

13・溝口神社（元赤城社）・簡易水道（昭和6年、水道組合碑・水神宮祠）・水の苦労伝える）溝口村の鎮守「溝口神社・明治期」明治29年造られた祭礼用幟（※ノボリ）は勝海舟（海舟安房・文字）の

筆。簡易水道；名主丸屋の井戸を親井戸とし→桶→桶の引水設備、安政３年関東大震災設備打撃・簡易水道Ｓ６年完成。

○勝海舟筆幟；一郷咸豪明神之靈萬家奉祝太平和（イツキョウコトゴトクシメイノレイコウマリバンカクシユクタイヘイワ）明治２９年９月１７日・現在は正月３が日（旧９月祭礼）

14・宗隆寺（日蓮宗・興林山）・御会式（芭蕉句・浜田庄司墓）（世を旅に代わかく小田のゆきもどり・灰吹屋二兵衛）前、天台宗・住職、興林と溝口地頭、宗隆が「日蓮宗を信じよ」の夢のお告げで、池上本門寺にお教えを受け、日蓮宗に改宗したのが５百年前。万燈・三重や五重の塔を型取った、灯りが点（ト）され、街道をねり歩く、本門寺に次ぐ御会式。

15・蘭方医太田家と種痘（イギリスのジェンナー種痘法発見７０年・日本伝来２０年後）

太田良海初代開業１７９８（寛政１０）西郷藩主松平家御殿医。その後、良海とその子東海は江戸三代蘭方医数えられた大槻俊斉から蘭方を学び種痘法を修得、俊斉が「お玉が池種痘所」（後東大医学部）開業に東海も協力。

16・庚申塔・大山道標

庚申信仰・見ざる、聞かざる、言わざる、三猿石に彫る・道標・「東江戸道」「南加奈川至」。

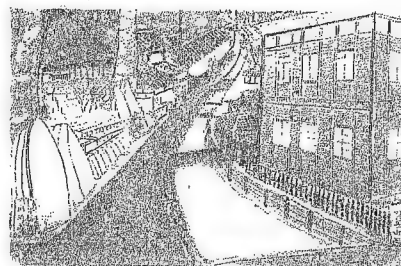
17・ねもじり坂（下作延の土地の人が古くからねもじり坂と呼んでいる坂・由来不明）

明治の中頃までは、道幅も狭く、もっと急な坂でした。東京への野菜を運び、帰りには下肥を積んでくる牛車や荷馬車などは、人が後押ししなければ登れない程と言われている。そこで、別名を「はらへり坂」。

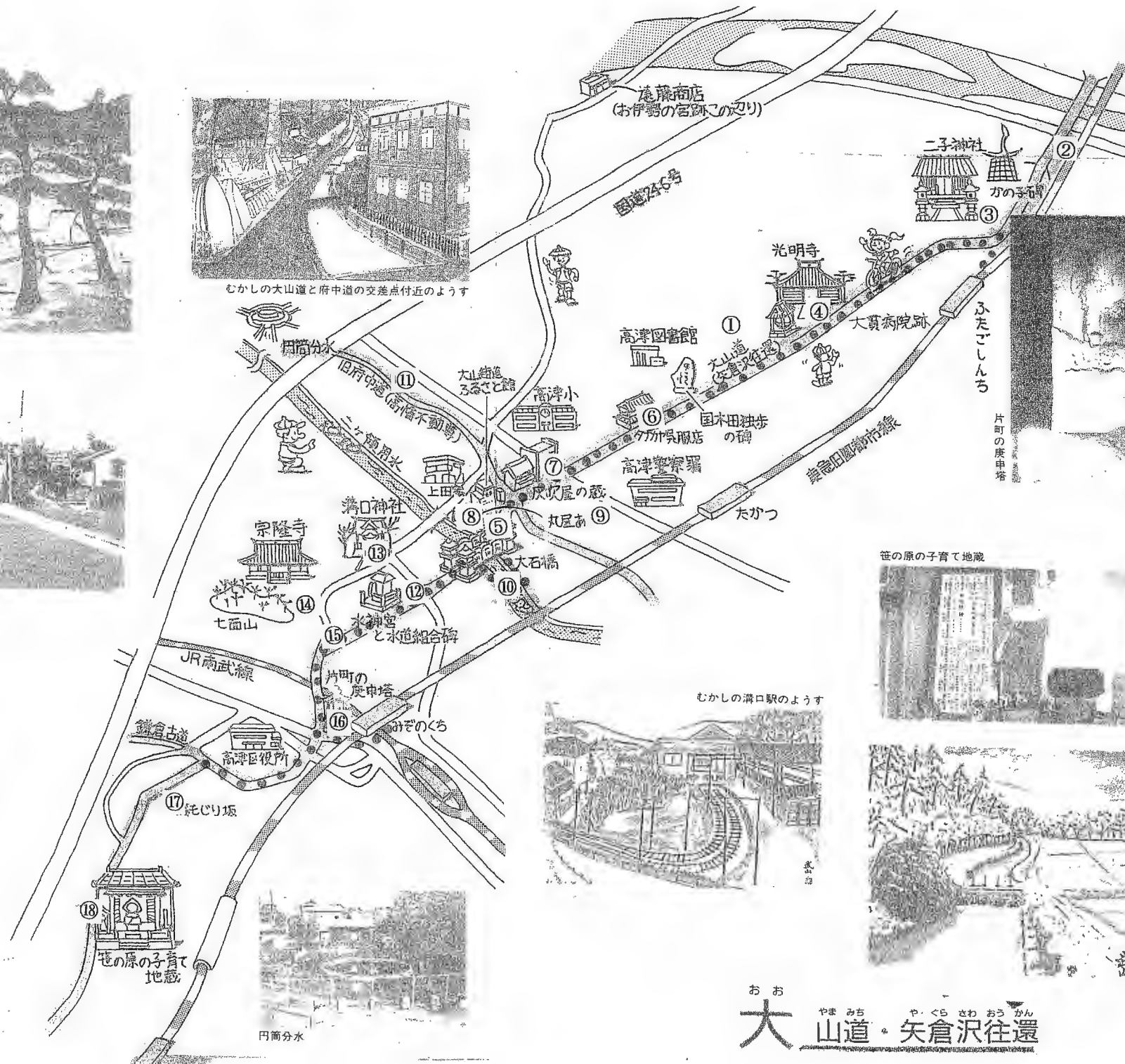
18・笹の原の子育て地蔵（末長、ミカ、と下作延１６軒が講をつくり護、マ、ってきた地蔵尊昔、西国巡礼から戻ってきた村人が、子を授かったお礼に建てたと伝えられる。当時は笹の原という淋しい笹鳴りのする中にポツンと立っていたのか。



ねもじり坂の入口付近



むかしの大山道と府中道の交差点付近のようす



片町の庚申塔

笹の原の子育て地蔵



むかしの溝口駅のようす



むかしの二ヶ領用水のようす



大山道と府中道の交差点にあった道標



円筒分水

おお
大 山道・矢倉沢往還
やま みち や・くら さわ おう かん